

## サグラダ・ファミリアは「森」の聖堂 「狂気か天才か」ガウディの原点は、少年時代の自然観察だった

東京新聞 2023年6月18日 配信



サグラダ・ファミリア聖堂外観(2023年1月現在)



自然の森の中に入ったようなバルセロナのサグラダ・ファミリア聖堂の内部。ステンドグラスから注ぐ光は刻々と色が変わる

スペイン・バルセロナで140年以上にわたり建設が続くサグラダ・ファミリア聖堂。その全容をひもとく「ガウディとサグラダ・ファミリア展」(東京新聞など主催)が、東京都千代田区の東京国立近代美術館で13日から始まった(9月10日まで)。「未完の聖堂」に込められた建築家アントニ・ガウディの思想とその魅力を探る。(バルセロナで、加藤美喜、写真も)

◆「なぜ柱は真っすぐじゃないといけないのか」 聖堂内に足を踏み入ると、そこは「森」。柱は樹木のように上部が枝分かれし、天井には木の葉が茂る。ステンドグラスから差し込む光は、太陽の動きで刻々と色調が変わる木漏れ日だ。外観の装飾にも動植物があしらわれ、美しい自然の要素で満ちている。ガウディは子どもの時、重度のリウマチで学校に行けず、祖父母の村で静養した。サグラダ・ファミリア聖堂の会長代理エステベ・キャンブス(74)は「子ども時代に自然の観察を続けたことが、ガウディの原点にある」と指摘する。木は曲がっていても雨風の中で力強く立っている。「なぜ柱は真っすぐじゃないといけないのか」。建築学校で教師に訴えたガウディ。教師は卒業式で「狂気か天才か分からないが、これまで誰も考え付かなかったことを考えている人だ」と評したという。

◆「機能と構造と象徴」一度に解決 世界遺産に登録された「降誕の正面」で、天使像や植物の扉などを手がけた彫刻家の外尾悦郎(70)は「ガウディが天才的なのは、機能と構造と象徴の問題を常に一度に解決していること」と話す。例えば降誕の門の柱を構造的に補強する台座のカメは、雨どいの機能を



「降誕の正面」の台座のカメが示す「機能と構造と象徴」について語る彫刻家の外尾悦郎



「降誕の正面」の植物の扉を手掛けた彫刻家の外尾悦郎は、「ガウディの自然の観察力を見てほしい」と話す

持ち、不変の象徴でもある。外尾によれば、ゆっくりでも休まずに聖堂の建設を続けようというメッセージでもあるという。カンパスによると、今回は日本で過去最大のサグラダ・ファミリア展となる。世界で初めてスペイン国外に出すガウディ作成のオリジナルの柱の石こう型や十字架の模型をはじめ、120点以上の模型や資料、写真、最新の空撮映像でガウディの建築思想と豊かな創造の世界を紹介する。外尾は「苦悩の中から自然を謙虚に見つめ、ダイナミックに建築に生かしたガウディの姿勢は、厳しい自然から学び生きてきた日本の文化や精神性にも通じる」と指摘。「ガウディの自然観察の力をぜひ見てほしい」と言う。(敬称略)

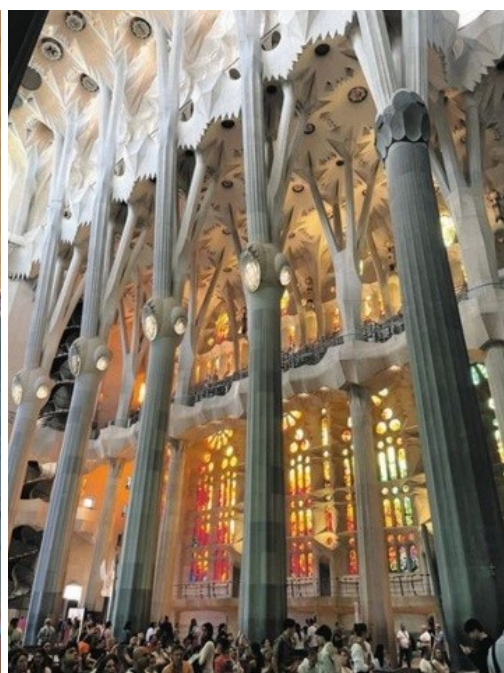
連載・ガウディが見た世界 ②

## 図面、模型を失ったサグラダ・ファミ ガウディが後世に残した完璧な「手掛かり」とは

東京新聞 2023年6月19日 配信



ガウディが多用了した双曲面の模型を手に、聖堂の構造について熱く語る9代目主任建築家のジョルディ・ファウリ



幾何学のルールで作られ、下から上に行くにつれて円に近くなるガウディの柱

ガウディはサグラダ・ファミリア聖堂が未完のまま、1926年に死去した。その10年後にスペイン内戦が勃発し、混乱の中で聖堂も襲われた。主任司祭は殺害され、ガウディの仕事場は焼き払われた。図面は焼け、模型はバラバラに。断片や破片をかき集めての復元作業。後世の建築家は不完全な手掛かりで聖堂の建設を引き継ぎ、相当苦勞したのでは一。ガウディの後継者である9代目主任建築家ジョルディ・ファウリ(63)に質問すると、即座に答えが返ってきた。「いや、ガウディは完璧な手掛かりを残した」理由は幾何学。例えばガウディの二重らせん柱は下から上に行くにつれ、八角形、十六角形、三十二角形、六十四角形というように円に近づく。ほかにも双曲線面、放物線面、らせん面など幾何学に基づいた形状が多usedされ、基本構造の多くが「明確なルールに基づいていた」という。「型はわずかしかなかったが、ガウディは『システム』を残してくれた」とファウリ。回転しているような柱の形は自然の木の形状を再現しただけでなく、十分な強度も備える。一見ばらばらに見える柱の直径や高さなども、規則的な比率があった。

また、建物は通常、基礎の土台から建築していくが、ガウディは先に「降誕の正面」をつくった。「自分が生

きている間はサグラダ・ファミリアは完成しないと分かっていた。ガウディは明確なビジョンを示し、残りを後世に託した」柱の話を始めると、止まらないファウリ。日本の展覧会に初出展されるガウディ作成の柱の型は古くて小さいが、「とても重要な展示物だ」と断言する。コンピューターのなかった時代に、ガウディは自然の美と幾何学を組み合わせたシステムを生み出した。「ガウディは天才であると同時に、努力の人だった。そして、将来の技術が建設を促進すると分かっていた」。ファウリは地元のカタルーニャ語の通訳を介さず、記者に直接英語で伝えようと、しばらく言葉を探してから「トラスト(信頼)」と言った。「ガウディは仲間を信じ、将来の人々を信じていた」(敬称略)＝バルセロナで、加藤美喜、写真も



サグラダ・ファミリア聖堂の塔のらせん階段。聖堂内はガウディが好んだ幾何学模様で満ちている



受難の正面の上に掲げられたガウディの十字架

### 連載・ガウディが見た世界 ③

## サグラダ・ファミリアは「石の聖書」 ガウディ、リウマチや失恋...幸せを渴望

東京新聞 2023年6月20日 配信

「ガウディは悲しみを多く経験し、孤独な人生を送った」。サグラダ・ファミリア聖堂の会長代理エステベ・カンパス(74)は言う。貧しい職人の家庭に5番目の子として生まれ、すでに2人の子を病気で失っていた両親はガウディの健康を願ったが、重度のリウマチにかかり、その後生涯を通じて病氣と闘った。若きガウディは医学生を頼りバルセロナに移った。しかし間もなく兄は25歳の若さで死亡。2カ月後には母も亡くなった。カンパスによれば、姉の夫はアルコール依存症で苦勞が絶えず、その娘も生まれつき病

弱だった。ガウディは建築学校の苦学生時代から、父や姉、めいの面倒をみななければならなかった。自身は3度の恋を経験したが、いずれも成就せず生涯独身だった。カンプスは「ガウディは若い時は遊んだ時期もあったが、多くの悲しみを経て、神へ傾倒していった」と話す。彫刻家の外尾悦郎(70)も「ガウディはリウマチと闘いながら、毎日10キロ歩くことを課して健康を維持した。とても意志の強い人だった。不幸の中で幸せを渴望していた。その苦悩がガウディを深い精神世界に届けた」とみる。



ガウディがデザインした家具の前に、信仰心と高い精神性について語るサグラダファミリア聖堂の会長代理エステベ・カンプス=加藤美喜撮影



聖母マリアの戴冠を描いた「降誕の正面」の彫刻。ガウディは聖書の場面をふんだんに描き、サグラダ・ファミリアを「石の聖書」としてもデザインした



聖書の場面がふんだんに描かれた「降誕の正面」。ガウディの作品群の一つとして世界遺産に登録された



イエスの誕生の場面を描いた「降誕の正面」の彫刻

信仰心の深まったガウディは、サグラダ・ファミリアを「石の聖書」としてもデザインした。外観の各正面には聖書の場面の彫刻が並ぶ。カンプスは「ガウディはキリスト教を信じない人にも、教会の外から聖書

の内容がわかるようにした」と説明する。聖堂内は建物だけでなく家具にも、聖母マリアや養父ヨセフなどイエスの聖家族にまつわるシンボルがふんだんに盛り込まれている。カンプスは「高い精神性を持ち、質素であることがガウディを人間として最も尊敬するところ」と言う。ガウディは晩年、サグラダ・ファミリアに住み込み、聖堂の建設に没頭した。73歳の時、仕事帰りに路面電車にひかれて亡くなった。あまりに貧しい身なりをしていたため、タクシーに何台も素通りされ、病院搬送が遅れたとされる。死亡時、ポケットには、祈りに使うロザリオとドライフルーツしか入っていなかったという。（敬称略）